



明治四辛未年  
八月九月十月  
新聞誌校寫

西垣文庫  
文庫10  
7353  
2



特 文庫10  
7353  
2

一 九月廿二日 聖上御延辰之り

一 新巻の水雷火之り

一 一 御課業書類之り

一 品川縣答の申付小全村甲政之り

一 宗元巖原藩知事管内告諭書

一 大坂市町取締ノ事

一 東京府取締ノ事

一 米國ニテ日本支那新聞之書

一 東京島原引拂ノ告諭



西垣文庫

- 一 辛未八月廿日東京府ヨリ宸賞方ニト者九ノ
- 一 大藏省中察司定メノ事
- 一 方今 至上日々政廳へ總御勅語ノ事
- 一 上代衣服考
- 一 横濱千ヤツパニール經濟論ノ事
- 一 至上神祇省勿勢省へ臨御勅語ノ事
- 一 九月十七日於 宮中 皇大神宮 御拜式
- 一 東京府下上郎開墾桑茶坪數
- 一 三井會社ノ事

- 一 日本改革ノ事ハ肥後他ニ不劣事
- 一 歐羅巴米利堅支那留學生ノ事
- 一 通俗英吉利單語本ノ事
- 一 松根油燧明ノ事
- 一 山口縣舊知事管内告諭ノ事
- 一 西京湯屋ノコト
- 一 毛利山口藩知事上書ノ事
- 一 辛未十月東京人負調ノ事
- 一 東京カルクヤ西洋諸國へ行歸國ノ事

- 一 至上月々御課業書籍ノ事
- 一 本所緑町展覽會ノ事
- 一 鍋嶋藩知事管内ノ告諭書
- 一 佐賀縣士族歎願書
- 一 西洋國々名
- 一 十字佛戦争ノ事

新聞雜誌第十五號

明治四年辛未

○九月廿二日 聖上御誕辰ニヨリ百僚千官 天長ノ  
 佳節ヲ拜賀ス 上之ニ酬宴ヲ賜ヒ衆庶ト歡樂  
 ヲ同フシ玉ヲ第十字 御出門馬車ニ御シ陸軍ノ整  
 列ヲ巡覽アリハサレタリ且此良節ヲ賀シ奉ラニ為メ外國ノ  
 軍艦祝砲數発ヲ發ス又濱殿延邊館ニ各國ノ公使ヲ  
 饗食セラレタリ此日天下ノ刑獄ヲ止メラレ恩波ヲ四海ニ  
 播ホクタル轡ハ下府中ハ云ニ及ハズ普ツ天卒ソウ土苟トモ 天恩ヲ

被ル者誰カ此ノ 聖辰ヲ拜賀セサルベケンヤ

倫敦新聞抄譯

此度新發明ノ水雷火アト之ヲ多ク備フルハ軍務局ノ  
一要務タリ石水雷火ハ新發明ノ製作ニテ各箇皆綿火  
藥八十四斤ヲ以テ破裂セシムヘキ由

緒言

元天下ノ物事日ニ新ナルニ我未ク見聞セサルヲ知テ吾知  
識ヲ廣ムルヨリ樂シキハナシ見聞ノ狭キ由舍人ハ心頑ニ知暗  
シテ疑惟ムク多ク竟ニ我ヲ是トシ人ヲ非トスノ過アリ今日カ  
辱キ 御代ニ逢ヒテモ遠境ノ人ハ 大政ノオマヲモ知ラテ却テ  
疑非ル者モアルベシカクテハ逢ヒカセニ生レシカニナシ今 官許ヲ  
受テ新聞私局ヲ開キ 大政ヲ始メ諸府縣ノ變革又ハ里巷  
ノ瑣事ハ外國ノ異聞マテ見聞ニ隨ヒ刊行スル我 日本國中  
人々ト新知ヲ聞ク樂ヲ同シ頑ナル心僻ナル事ヲ棄テテナリ願ハ

此冊子ヲ讀玉フ人々一ヲ聞テニヲ推シ近ヲ知テ遠ヲ察シ天地  
間ニハ我意外ナル驚可ク喜可キ事多ク唯一隅耳ヲ見ルハ  
曰舎人タルヲ免レス夏虫氷ヲ疑ノ笑有リト知玉ヘサテコソ復古  
ノ 大御代ニ生レシ人タルニ負カシト云ベケレ

新聞雜誌第十一號 明治辛未八月

方今上下才力知識ヲ研磨スルノ運ニ方リ恐々クモ  
主上日々ノ御課業 日本書記 日本書記集解 論語  
元明史略 英國誌 國法汎論 人身究理書 御講究  
アラセラル由 億兆ノ子弟宜シク 聖旨ヲ奉體シ日夜勉  
勵各ツノ才識ヲ開達スヘシ 豈ニ優遊安逸ニ過  
ヘケンヤ

○岳川縣管内武州小金井村里 大久保彦三郎ノ墓  
墓人ノ者ヤ合口 鰥寡孤獨廢疾等ノ者 救助ノ各余

救若干ヲ出シ縣廳ノ允可ヲ得一社ヲ設ケ養育社ト稱セリ遠近ノ貧民之ニ憑テ產業ヲ營ミ其生ヲ保安スル者不鮮ト云

宗元嚴原藩知事管內工告諭書寫

七月十四日依召參朝ノ處 出御ノ上三條右大臣殿

勅詔捧讀有之今般吏ニ藩ヲ廢シ縣ト爲シ本官免セラルル旨

謹而拜聽候抑治道ハ人心安危ノ係ル所治亂時勢ノ變革ニ

其制モ亦變スル所以不特多言事候皇朝姓古郡縣ノ制

援王エラ私有シ大義名分ノ紊亂概子一天ノ下アルヲ不知ニ至宣

可歎可悲ノ限ニ候ハスヤ 皇運未墜戊辰ノ春 太政復古維

新ノ政治被舉行實ニ千載ノ盛舉再々天日ヲ拜シ天下人々始テ

大義名分ノ存スル所ヲ知ル爾來諸藩版籍奉還被聞食三治一途ノ

政體ニ歸スルト雖モ其名有テ其實舉ラズ治道多岐各自從來ノ弊

習ヲ脱スルヲ得ス迄回不抜ノ 震斷廢藩ノ一舉政柄歸一ノ大

規模ヲ定サレ候儀深ク不堪感戴候既ニ當節登京ノ上辭

職ノ決心ニ及候次第崎陽ヨリ告知セシムル所ニシテ其心事各

可令體知候ハ氏舊藩ノ儀西隅ニ僻在シ天下ノ形勢事務ニ

疎ク勤スレハ方今ノ時機ニ適セサル舉動無キニシテ非不

殊ニ上下ノ好誼數百歳ノ久シキヲ持シ今日相共ニ不可忍ノ情  
情アルハ然ル事ニ候ハ正從前君臣ノ契因ハ闔國ノ体裁  
時變ノ然ラシムル事候ハ是處今日ニ至リ其舊情ヲ思  
フハ一己ノ私意天下ノ公儀ニ於テ可論ニアラス今ヤ維新  
ノ秋ニ齊リ尺土一民モ私有ス可ラサルハ素ヨリ贅ス  
ルヲ不待儀ニ付私情ヲ捨公義ヲ守リ祖先以來各宗  
氏ニ忠アル所以ノ心ヲ移シテ一意 天朝ヲ奉戴シ今日ノ  
御越旨ニ稱ヒ候様有之候コリ則某ヲシテ開化ノ御進  
歩補翼奉ラセ候一端 皇恩ノ萬一ヲ報セシメ候ニ當リ

祖先相承テ數百歳ノ情惻モ爰ニ頭候儀ニ付各某カ衷情  
體ニ首管内中末々ニ至マテ遍ク懇諭ヲ加ヘ當リノ  
御起意厚ク相辨ヘ聊心得違ノ筋無之様專ラ可令指  
揮候尚韓地御用件ニ付近々下向ノ上親敷相違  
品可有之候云々

○大坂市中四組ニ分チ四區取締長一人取締區長四人取締掛六人  
番長十二人伍長五十八人番卒二百人差置レ日夜巡邏セル付  
強盜暗殺等ノ患大ニ減シ市民一統感佩セリト云



○東京府中取締區兵所是マテ市店ナドヲ借入出張イタ  
セシニ近頃ハ盜賊等ノ患少ナキニ感服シ第五大區中駒形並  
木町邊ノ者共申合テ淺草須賀町ハ區兵所一ヶ所又池田屋  
市兵衛ト云ル者一カニテ同新福富町ハ一ヶ所石西所イツレモ  
煉火石ヲ以テ築キ献納致度段願出シカ免許アリテ當前  
築造最中ナリト

明治五年八月 第十卷ノ内ニテリ

○近頃和國ニテ在ノ新聞アリシヨシ支レ物ニ反對ト云ルトアリセテ  
日本支那ニタトヘシ支那ハ西海第一饒地ヲ占メ天下第一ノ  
人口ヲ持テ數千年ノ昔ハ自ラ文明國ト自負ハセリ且輓  
近ニ至テ各國ト交際ヲ始ムル今ヲ去ル多年ナリ然ルニ日本ハ  
一孤島ヲ境トシ其間港スルマ近キニアリ西國ノ沿革其趣  
如此ニシテ今我國ニ支那人ノ入ルヤ其教ヲ知ラスト雖氏皆  
礦山ノ役吏或ハ奴隸トナリ甘シメ人ノ使役ヲ受ケ其目的  
ニ至テハ一囊底ヲ滿タシ身ヲ安逸ニ終ヘントヲ欲ス  
日本人ハ然ラス試ニ見ヨ太平洋ヲ渡リ月ヲ追テ大西

洋ニ航シ其求ムル所ノ者ハ僅ク一囊底金ノ如キモノニ  
非ズシテ滿胸ノ智ナリオナリ千金難購ノ物ヲ欲シ  
國民ヲ勵マシ物ヲ開キ務ヲ成ニト其自國ノ他國ニ  
及ハザルヲ知テ汲々反求スルノ志愛スベキニ非ズヤ  
日本支那ハ同一ノ黃種ナリト雖ハ人心人情ノ異  
ナルト白種中英ノ「スペイン」ニ於ルガ如シ 日本モ  
自今ノ憤勵ヲ以テ開化ヲ講スレハ數十年ノ後ハ文明  
國ノ列ニ加ハルト必セリト

石ハの海に辛未九月ノ初中為ニアリ

東京嶋原引掃ノ節府廳ヨリ告諭書寫

○府下遊廓ノ儀慶長ノ始迄ハ一定ノ場所ナク賣女ヲ  
置ク僅ニ四五軒ニ過ス慶長十七年ノ頃庄司甚奎門  
妓構追々所々ニ星散シ弊害不少昔建白ニ依テ元  
和三年ノ頃葺屋町今ノ傳馬町ノ邊ニテ二町四方ノ地ヲ傾  
城町トナシ妓樓ヲ悉ク此地ニ集メ他ノ市街ニ遊女  
ヲ置ク嚴禁タリ爾後明曆二年日本堤ノ邊今ノ  
茅原ニ移シ是府城近傍ニ遊廓ヲ設ルハ風俗ヲ  
紊シ市民ヲ害スルノ最モ大ナル者ニシテ制度ノ宜ク

禁スヘキモノナレバナリ度應明治ノ際更ニ深川根  
津ノ西遊廓ヲ開ク當時ノ事實實數知スヘカラズト  
雖氏開廓已還僅々ノ年月ヲ以テ弊害相生シ之カ爲ニ産ヲ  
墜シ職ヲ失フ者勝テ不可言也抑官ハ民ノ利ヲ  
興シ害ヲ除キ一人モ其處ヲ得ザル者ナカラスムヘキニ去ル辰年  
新島原開廓ノ後御許容相成シハ外國居留地創設ノコトニ悠  
久ノ策ニアラス然ル處段々弊害モ不尠現今漸次ニ制度確立  
風俗ヲ正フスルニ至テハ廢除ナクシバ有ベカラズ然トモ急切迫ニ  
及テハ變業ノ目的モ立難ク困難モ之アルベクナレト十人ヲ

憫ミテ千人ヲ傷ルヲ顧ミズ百人ヲ救テ萬人ヲ陷ラスルヲ  
顧ザルハ人民ヲ保護スルノ意趣ニ非ル也故ニ断然廢  
除ノ御處置有之事也憶フニ是迄島原ニ住居スル者  
職業ヲ改メ高買ヲ營ニト欲セハ御許容アラシ又其地  
ニ就テ蒸氣仕掛ノ機械場ヲ設テラルノ説アリ市井ア  
婦女子等モ其身分相應ノ職業ニ心掛度モノナリ云

右明治四年九月新法ニアリ

○辛未八月廿日東京府ヨリ褒賞ヲ受ケテ徒畧記

一 盃一組 白細三匹

新吉原江戸町一丁目 松本金兵衛

右去年閏十月中遊廊内近邊十九町ノ窮民へ米銀若干ヲ

施助スルヲ賞セラル

一 白細一反宛

日人抱遊女

蒲湘

今紫

小太夫

盛糸

右主人ト共ニ同様施助スルヲ賞セラル

一 盃一組 白細一匹

本西留所

田中依治兵衛

右同年十二月中居町花隣町貧民三百四拾軒へ金一両宛

施助セシヲ賞セラル

一 盃一組 白細一反

本船所

植村和吉

右當春二月一カニテ江戸橋際往還道路ヲ普請セシヲ賞セラル

一 盃一組 白細一反

靈岸島町

寺嶋利兵衛

右去年年十二月中居町ノ窮民并平日出入ノ徒へ餅米

金子及物等ヲ施助セシヲ賞セラル

上ノ數人ノ如キ皆資性仁慈ノ發スル所ニシテ濟恤ノ志

真ニ感ズルニ堪ヘタリ況ヤ富豪貪悖飽クヲ知ラス

毫モ窮餓ヲ恤ムノ心ナキ者實ニ娼婦ニモ如スト云ヘシ

○大藏省中寮司左ノ通定メラレタリ

一等寮 造幣 租稅

二等寮 戶籍 營繕 紙幣 出納 紗計

三等寮 記錄 驛遞 勸農 檢查

一等司 正算

任造幣權頭 造幣頭馬渡俊邁

任租稅權頭 松方正義

同 吉田清成

任戶籍頭 從六位河野敏錄

任營繕頭 從六位岡本義方

任營繕權頭 從七位山口忠良

任出納頭 從五位得能通生

任紗計頭兼正算正 正六位中村清行

任檢查權頭 正六位伊集院兼寬

任記錄權頭 正七位兵頭正懿

任驛遞頭 從七位前島 密

任勸農頭 正七位福原俊孝

任正算權正 中村與兵衛

任副議長

從五位江藤新平

任少議官

元德五年從二位蜂須賀茂韶

日

元龍四年從四位大給恒

日

從四位秋月種樹

日

大藏大丞谷鏡臣

日

德島縣大參事小室信文

任陸軍少將

海軍少將細川護久

任大坂府大參事

從五位渡邊昇

任神奈川縣知事

陸奥陽之助

○方今恐多クモ

至上月々政廳エ

臨御萬機ノ御政

務

聞食サセラレ一日太政大臣ヲ召サセラレ左ノ

勅語アラセラレタル由

朕惟フニ風俗ナル者移換以テ時ノ宜シキニ隨ヒ

國體ナル者不拔以テ其勢ヲ制ス今衣冠ノ制

中古唐制ニ模倣セシヨリ流テ軟弱ノ風ヲナス朕大

慨之ラ夫レ神州武ヲ以テ治ムルヤ固ヨリ久シ

天子親ラ之ガ元師ト爲リ衆庶以テ其成ヲ仰ク

神武創業 神功征韓ノ如キ決テ今日ノ風姿

ニアラズ豈一日モ軟弱以テ天下ニ示ス可ケンヤ朕今  
断然其服制ヲ更メ其風俗ヲ一新シ

祖宗以來尚武ノ國體ヲ立ント欲ス汝其レ朕カ意  
ヲ體セヨ

○上代衣服考 一名神服考 豊田長敦著述

右當今ノ衣服ハ 應神天皇以來漢衣ヲ模シ所  
謂カラ衣ト唱シモノ 我國固有ノ衣ハ 神ノ御代ヨリ  
御傳來恐多モ代々ノ 天皇召セラレ庶人モ服シタルハ

今ノ洋人ノ服ニ異ナラス進退自由ノモノナル由紀記

萬葉ニ證ヲ得今般官許ヲ經私店ニ於テ發兌致ト即

ボノ程奉希候

東京日本橋通四丁目

金花堂 須原屋佐助

○ 千八百七十一年第九月十四日 横濱刊行チマツ

我七月三十日

新聞第ニ卷第四十一號ニ我新聞雜

誌第六號附録ニ出ス新封建論ノ評アリ今之ヲ

節譯ス

此論ノ記者ハ日本ノ士人等遊手シテ他人ノ辛苦經營セ  
ルモノヲ消耗スルノノ糶キヲ譏誚シ此種類ノ永ク存在  
スル間ハ大ニ政府ノ廢務ヲ委靡セシムルヲ論セリ  
此種類ハ嘗ニ國ノ歳入ヲ徒食シテ真ノ國軍ヲ編  
制スルヲ妨ケ國ヲシテ貧困ナラシムル而已ナラス更ニ開化  
ノ道ヲ梗塞セリ若シ人アリテ經濟學科ノヲ研究  
スルモノアラバ必ズ日本ノ貧困ナルハ全ク此種類ノ存在スルニ  
因ルヲ知ラシ支レ財本ノ復生復生トハ財本ヲ費シ之ニ由テ  
復タ新タニ生スル物ヲ云ハ甚タ  
速カナルモノナリ然レ氏之ヲ消費スルト復生スルトノ間ニ

平均ヲ保ニ非レバ「英國」ノ如キ富強ヲナス能ハズ方今「英國」  
内ニ在ル貨財ノ中十年前以前ニ在リシモノ現今存スル  
モノハ幾クカ有ル其中ノ大半ハ去ル一ケ年中中ニ人  
エヲ以テ生ゼシモノナリ財本ハ唯之ヲ貯蓄スルニ  
因テ存在スルニ非ズ常ニ之ヲ復生スルニ因テ存在スル十  
リ若シ國民災害ニ因テ損失ヲ受ルヲアリ氏國民離  
散死シシテ減少セシニアラサレハ恢復スルノ力其割  
合甚速カナルモノナリ然ルニ殆ニ二百萬人ノ遊手ノ  
徒ヲ衣食セシムル爲メニ浪費スル所一ケ年一人ニ付



少クハ十ポントト算シ總計一ケ年ニ二千萬ポントレノ國  
費タリ若シ此等ノ人自巳ノ勤勞ヲ以テ生活ヲ立テ一ケ年  
ノ暮シ方ノ半ヲ剩サハ國ニ財本富殖シテ曠業ノ  
モノ無ク且ツ其復生スル所ノモノ悉ク皆國ノ財貨ト  
ナリテ其富計ルヘカラズ今ノ改革ハ此種類ヲ減少  
セント欲スルニ在リ國ヲ富スノ道ハ此改革ニ如クモノナ  
シ我輩ノ所見ニテハ方今日本ノ帝國ヲシテ堅固ナ  
ラシムルノ方策ハ國軍ヲ編制スルト一定ノ法律書ヲ  
制定スルト租税ノ収法及ヒ貨幣ノ通用ヲ定ムルトニ在リ  
價ヲ増スベシト云々

○辛未九月十二日 主上神祇省外務省へ 臨御同十四日  
大藏省へ 臨御在ラセテヒタリ

九月十四日勅語ノ寫

朕 恭シク 惟ミルニ 神器ハ 天祖威靈ノ憑ル所

歴世 聖皇ノ奉シテ以テ天職ヲ治ノ玉ヲ所ノモノナリ今ヤ  
朕不逮ヲ以テ復古ノ運ニ際シ悉ク  
鴻緒ヲ兼ク新ニ  
神殿ヲ造リ 神器ト 列聖皇靈トヲコニ奉安仰  
テ以テ萬機ノ政ヲ視ント欲ス爾群卿百僚其レ斯旨ヲ  
體セヨ

○自今九月十七日於 宮中 皇太神宮御拜式被爲定  
至上 中宮 御遙拜并百官拜禮又同日 賢所  
御親祭 中宮御拜百官拜禮被 仰出タルヨシ

○来ル十月朔日ヨリ同十日ノ間文部省博物館ニ於テ古代ノ  
器物天造ノ奇品及ヒ漢洋船載新製ノ諸器械等  
展覽ノ會ヲ設ケラル毎朝九字ヨリ午後四字ニ至ル迄一日  
大略千人ヲ限トシ切手ヲ以テ入觀ヲ許サル切手ハ博物館  
及ヒ諸方書肆ヨリ相渡サルヨシ又珍奇ノ物品ヲ藏ス  
ル者ハ之ヲ齎出シテ博觀ヲ助クルヲ許サルト云

○ 東京府下諸上邸開墾畧表 辛未五月中  
一 御拂下地凡百二十萬千六百四十七坪餘

一 拜借地凡四十六萬百四十坪餘

合凡百六十六萬一千七百八十七坪餘

日桑田凡七十五萬七千八百三十坪餘

茶苑凡八萬九千八百八十八坪餘

水田凡四萬六千五百二十四坪餘

建物坪凡三千四百五十九坪餘

未墾地凡四萬九千六百二十四坪餘

○方今會社ノ最モ信スベキハ三井組ノ為務會社ニ如クモナシ  
近以東京濱田銀坐ニ新ニ會館ヲ開キ益其業ヲ盛  
大ニ爲セルヨシ然レ其規則ノ公告ナキ故世上ニ往々之ヲ  
知ラサルモノアリ此節之ヲ問合セ其答書ヲ得タルニ其全  
文ヲ左ニ掲ゲ以テ世ノ知ラサル者ニ告ク 貴翰拜見  
然レハ當為務會社ニ他向金子預リノ儀御問合  
ノ趣兼知信右ハ金百兩ノ一ヶ月金一兩ノ利息充相  
預リ候月日ヨリ三月間互休上初月ヨリノ利息所返  
シルル規則ニテ右以內ニ元金所返候ト爲テ至利

島々御座る金高し候ハ何程ニテモ相預申候云

○ 千八百七十一年八月十日 我八月廿七日 横濱刊行へ

ラルド新聞二千四百五十三號ヨリ抄譯ス

日本改革ノ事ハ肥後ニテモ他ノ諸州ニ劣ラズ行  
リ此州ノ長官等大改革ヲ行ハントテ自ラ其身ヲ退キ  
且衆人ノ劬トナリタレバ其企テタル大事充分ノ成功ニ至ル  
ヘシ此州ノ人民上下ノ別ナク其目的ヲ達セントテ國ノ  
爲ニ盡カシ又巴ノ慾ヲ塞グテ日本人ノ最美ナ

ル性質ノ一ヲ見ルベク必ズ西州諸國ヲシテ深ク感服  
セシムヘシ且此種ノ事柄頻年踵ヲ接シテ起リナカラ  
若シ血ヲ灑クニ至ラズシテ功ヲ奏セハ實ニ世恩ノ歴  
史中ニ獨歩スト云ヘシ縣士ノ數ハ著シク減シテ前年  
ニ比スルハ今ハ十分ノ一ヨリモ遙ニ少ナシ且休暇ヲ賜  
リタル人ニハ丈々田地ヲ配賦セリ僧徒モ同様ニ減  
少セラレ今日迄時々祖先ヲ祭祀スル爲ニ別ニ俸祿ヲ  
與ヘ置タル者マデモ皆若干ノ償ヲ與ヘテ退去ヲ命セ  
ラレ向後ハ其自カラ以テ活計ヲ立ルトナレリ人民ハ歐

羅巴<sup>ロバ</sup>ヲ字ニテ其頭髮ヲ断リ又近頃長崎ト同様ニ佛像ヲ開帳スル  
ヲ禁ズル令ヲ出セリ國內處々ニ英學校ヲ設クル備アリ我友肥後ニ  
逗留ノ間舊知事ノ弟良之助ノ宅ニ至リシニ其宅ハ歐羅巴風ニ建築シ  
テ精巧ナレ氏亦浮華ナラズト云リ良之助ハ相應ニ英語ヲ解シ又廣  
ク英語ヲ諳シ當今宇内ノ形勢ニ通曉セリ此人遠カラズ歐羅巴  
ニ至リ留学スヘシト云

○歐羅巴米利堅支那諸洲留學生總計三百五十四人ナリト云

引札

一 通俗英吉利單語篇二冊 梅浦元善譯

既ニ世ニ行ハル所々英吉利單語篇一小冊子ト雖<sup>カツシ</sup>氏<sup>ヒ</sup>切用  
樞機ノ語大概之ヲ輯メ入學ノ好門戶タリコレヲ諳記  
默<sup>シ</sup>識<sup>シ</sup>スル者ハ他日必ス思ヒ<sup>ナカ</sup>半<sup>ハ</sup>ニ過ル<sup>ル</sup>ト<sup>ス</sup>然<sup>レ</sup>氏<sup>ヒ</sup>邊<sup>ニ</sup>陬<sup>ニ</sup>僻<sup>ニ</sup>  
邑<sup>ニ</sup>師友ニ乏<sup>シ</sup>キ人其白本ニシテ読難キラ憂フ是ニ於テ余  
綴<sup>リ</sup>語<sup>ヲ</sup>其上ニ加ヘ雅俗ノ譯語ヲ其傍ニ附シテ之ヲ梓<sup>ニ</sup>トシ世ニ  
公布シ以テ童蒙進歩ノ一助タラシムト云二冊 譯者謹誌

賣弘所

奎文房

東京日本橋四日市

和泉屋半兵衛

○岸和田縣水嶋善一郎發明ニテ松根油ヲ新製セリ從來  
ノ種油ニ比較スルニ松根油七合ニテ種油一升ニ敵當シ  
火勢一倍盛ニシテ其價亦頗廉ナル由山野松根ニ  
富ル地其製場ヲ盛ニセバ利用更ニ大ナラン

○山口縣舊田知事毛利元德管内士族中へ告諭書全文

我家祖先諸公曠昔 天朝へ忠勤ノ餘勲ヲ以テ辱クモ  
累代防長二州ノ地ヲ領シ一萬有餘ノ士ヲ養育シ寒而  
衣饑而食スルヲ得ルモノハ偏ニ 天恩ノ優渥ニ因ルナリ  
汝等祖先之亦皆其恩資ニ與レリ雖然尸位素餐舊染ノ風  
習ニ安シ恩ヲ受テ無所酬モノ由皇ニ人臣ノ屑トスル所ナラシマ先  
考忠正公ニ至リ大ニ此ニ感スル所アリ抑數百年來政權下  
ニ移リ 皇運日ニ衰替シ人民 朝廷ノ尊ヲ知ラザルヲ  
憂へ奮然天下ニ先チ義ヲ邊隅ニ唱へ艱難ヲ凌キ不逞ヲ拂

再々 天日ノ光輝ヲ拜スルニ至ル 朝廷屢具偉勲ヲ賞  
セリ是皆汝等ノ親ク知ル所ナリ予不肖ト雖モ亦公ノ教諭ヲ奉シ  
日夜勦勵其功績ヲ隨カントラ恐ル畏者 朝政維新ノ日ニ當リ  
宜ク大ニ施設スル所アル可シ然ルニ中古群雄割據ノ勢ニ因リ  
諸藩各其土地人民ヲ私有シ 朝廷ハ徒ラニ空器ヲ擁シ政令  
其實ヲ舉ル能ハズ是ニ於テ己巳ノ歲四藩合議シ版籍ヲ奉還  
シ政令一ニ歸セシラテ願フ 朝廷之ヲ採用シ我ヲ待ニ不才ヲ  
以テセズシテ吏ニ知事ノ職ヲ命ベラル雨来勵精聊藩政ヲ整  
正スト雖モ未タ其治績ヲ奏セズ因テ惟フニ予ノ汝等ニ於ル君臣ノ

名義ハ既ニ藩籍奉還ノ時ニ盡ルト雖モ依然トシテ舊領地ヲ管  
スルヲ以テ猶或ハ君臣ノ餘習ヲ存シ隨テ藩政モ亦私情ニ  
流レ措置其宜キヲ得ル一能ハズ此等因襲ノ弊今ニ於テ  
一洗セズニハ何ヲ以テ 政令一ニ歸シ人民 朝廷ノ尊ヲ知シ故ニ  
此来又ハ官ヲ解シ一ラ願フ數日ナラズシテ廢藩為縣ノ令  
下ル且本官ヲ免シ縣廳事務ノ如キハ暫ク參事ニ任ス於是  
予カ素志始テ貫徹スルヲ得感激ノ至ニ堪ヘザルナリ予ハ  
今日ヨリ 闕下ニ任シ親シク 聖旨ヲ奉養シ日夜奮勵  
智識ヲ磨キ陋習ヲ洗除セントス此時ニ當リ汝等若シ舊

情ニ拘泥シ疑惑ヲ生スル一アラバ其責予ノ不職ニ歸シ  
朝廷ニ對シ奉リ深ク恐悚ノ身ヲ措クニ地ナシ願クハ汝等能ク  
祖先諸及ビ忠正公忠勤ノ遺意ヲ感戴シ且ツ時勢ノ變遷  
制度ノ改革トヲ推考シ公義ヲ取リ私情ヲ舍テ予カ心  
事ヲ洞察シ今春告諭スル所ノ如ク各々其職ヲ勉メ前途ノ  
目的ヲ定メ祖先以來 朝廷ノ爲メ盡ス所ヲシテ能ク始アリ終ア  
ラシメバ汝等祖先亦肩ヲ地下ニ開カシ然レバ則予ガ幸ノミ  
ナラス祖先諸公在天ノ靈モ亦其誠意ヲ鑒賞セラレシ

○物ノ齊シカラサルハ物ノ情ニテ價ヲ一ニセシトハ智巧ヲ塞クノ道  
ナリトテ此項西京ニテハ湯錢ノ一定セルヲ改メ其浴室ノ善惡  
ニヨリ價ノ高下ヲ自在ニスル一ヲ許サレタリ要スルニ浴湯職業ノ  
者社ヲ結ビ制ヲ立テ人ノ生活ヲ束縛スルニ近キノ弊アルヲ改メ  
且浴室ハ人體ヲ清潔ニスヘキ場ナレハ其結構モ自ラ羨麗  
潔淨ナラシメンガ爲ナリ又男女混浴ノ弊未タ止マズ之ヲ禁  
スル一最モ嚴ナル由



毛利元山口藩知事上書寫

臣元德謹而惟ルニ 太政一新 聖明英斷ヲ以テ封建ノ宿弊  
ヲ改革シ租郡縣ノ制度ニ復セリ隨テ會計兵備等目  
的相立ニ至レリ就中其各已ニ備テ其實未々舉ラガル事  
あり臣夙ニ 闕下拜趨ノ命ヲ蒙リ區々ノ微衷ヲ吐  
露セント欲ス然ルニ名古屋德嶋其他上表論述スル所能ク  
前途ノ形勢内外ノ事情ヲ洞觀シテ事理當然ナリ速ニ採  
擇舉行ノ實アラシトテ仰ク益シ此際ニ當リ門閥世  
襲ニ安シ身家ヲ顧慮スル所アル時ハ人才輩出ス可

サル必然ナリ因テ断然華士卒ノ名唱ヲ廢シ均ク平民  
トナシ其家祿ハ悉ク大藏省ニ收入シ公議ノ上相當ノ  
祿ヲ下賜リ更ニ一國ニ 府ヲ置キ天下ノ人才ヲ網羅シ其長  
官ニ任スルニ至テハ乃チ郡縣ノ名實相副ヒ全國一治ノ大本自ラ  
立ツトテ得シ臣資性庸劣ニシテ素ヨリ重任ニ堪カクテ願ニ  
辭職セントス然レ氏管内ノ人心偏固ノ風習一洗セズ日夜驚カ  
ラ盡シ聊カ藩政ヲ改ム爾後人心ノ方向稍定レリ然ルニ已  
巳ノ冬ニ至リ 朝旨ニ基キ常備兵ヲ編制シ國家ノ用ニ供セ  
ントナセシニ豈料ラシヤ兵隊中不良ノ徒一時ノ紛紜ニ乘

衆人ヲ煽動シ 朝憲ヲ憚カラス終ニ暴舉ヲナスニ至レリ是  
他ナシ臣ノ才劣リ識薄ク 勸旨ヲ貫徹スル能ハズ且所謂  
門閥ヲ脱セザルニ因ル深ク恐悚ノ至ニ堪ズ故ニ其職ニ在ル日  
モ安セス仰キ願クハ即今臣カ職務ヲ免セヨ然レハ退テ平民  
ニ歸シ日夜激勵シテ智識ヲ磨キ他日鴻恩ノ萬一二報シ後  
一位遺表ノ意ヲ通暢セントス 英明宜シク臣カ微衷ヲ  
憐察シテ之ヲ採用セシトテ期ス云々

明治四年辛未十月

○今秋中東京府下寄留人員 官ヨリ御調べ有シニ通計  
十萬九千六百七十四名ナル由 今春土着ノ人員六十  
七萬二千七百四十七名アリシ由 其後ノ増減及ヒテ數  
族類等ハ近日内之ヲ詳聞シテ掲出スヘシ嗚呼開化  
初運ニ當テ都府ノ盛ナル猶如此他日文運益開ケバ  
其熾昌更ニ數倍スルニ至ラシ

○東京市石川大門町淺野傳左日富茂町山崎栴右日茂金太郎  
右三名輕跳ヲ業トス過ル度應若三ノ春ヨリ西洋

諸国ヲ周遊シ殆ト六年ノ春秋ヲ經今秋九月ニ至リテ方メ  
テ歸朝セリ西州中ノ人深ク之カ技藝ヲ感賞セル由カ  
一ト技ヲ以テスラ其術ニ巧ミナルニ至レハ海外ヲ遍遊シ  
名譽ヲ宇内ニ鳴セリ況マ士君子タル者此開化ノ運ニ  
際シテ文藝ニ志ナク功名ノ稱スベキナキ者ハ實ニ輕技  
三名ノ者ニモ如スト云ベシ

○方今上下方カ知識ヲ研磨スルノ運ニ於リ恐多クモ

至上月々ノ御課業 日本書記 日本書記集解 論語

元明史略 英國誌 國法沉論 人身完理書

御講究アラセラル、由億兆ノ子弟宜ク 聖旨ヲ奉體シ

日夜勉勵各ソノ才識ヲ開達スベシ 堂ニ優游安  
逸ニ過クベケンヤ

○品川縣管內武州小金井村 野正 大久保臺六郎 其外十  
一人ノ者申合ハ 艱寡孤獨 廢疾等ノ者 救助ノ多ク 各金  
穀若干ヲ出シ 縣廳ノ允可ヲ得一社ヲ設ケ 義育社

ト稱<sup>ヨク</sup>ヒリ遠近ノ貧民之ニ憑<sup>ヨク</sup>テ産業ヲ營<sup>イナ</sup>ミ其  
生ヲ保安スルモノ不<sup>スノナカラス</sup>鮮ト云

○東京本所<sup>ミト</sup>緑町五丁目角藥種店伊勢喜別宅ニ於テ八月  
十五日ヨリ日敷十五日ノ間土石草木虫魚介禽獸奇  
物寫真圖等ノ展覽會アリ就中衆目ヲ驚醒セル  
物品モ亦多シトス昔年ヨリ東京ニハ書画碁將碁等  
ノ集會ハ盛ニ行レテ各其技倆ヲ競<sup>キ</sup>ヒ隨<sup>シ</sup>テ名手モ輩出セ  
シカ物産百工ハ國家ノ大益ヲ起シ人間須要ノモノナルニ是

等ノ集會アルヲ聞ズ今此舉ノ如キ其<sup>ハ</sup>音ヲ知モノト  
云ヘシ相繼<sup>ツ</sup>テ大都ノ諸君子百工技術ノ集會アリテ  
各其知見ヲ開キ精巧ヲ勵ム様アリタキセノナリ

鍋島元佐賀藩知事管内、告諭書寫

○己巳春謹テ版籍奉還セシ處不肖ノ身分新ニ被任知事其  
職ヲ奉シ藩政ヲ改革スル茲ニ三年未タ治績ノ實ニ奏<sup>ス</sup>ス  
奉對<sup>ニ</sup> 朝廷誠ニ以テ奉恐入候依之吏張ノ趣意ハ嚮ニ  
告諭スル所ノ如シ然ル處今般別紙 勅語寫ノ通益

以テ大義ヲ明ニシ名分ヲ正フシ名實相副ニ政令一ニ歸  
シ候タメ藩ヲ廢シテ縣ニ改ラレ因テ予知事職被免ノ御  
書付ヲ賜リ候ニ付謹テ職務ヲ解キ不日ニ致上京儀候  
此エハ管内下々ニ至ル迄益々朝旨ヲ奉戴シ益々方向ヲ  
是定シ大勉強カヲ奮起シテ各其職務ヲ進歩シ以テ  
予カ赤心ヲ他日ニ表頭ヒンコヲ希フ萬一是迄ノ私情ニ糊  
著シ方向ニ惑ヒ人氣居合ズ動搖ノ女ニ移リ候儀等有  
之候テハ實ニ予カ不職ノ責ヲ免レガルノミナラズ先考贈正  
二位公 皇室ニ忠事遊サレシ旨懐リ管内亦今日ニ  
竭ス所ノ道ヲ失フニ至ル冀クハ管内下々ニ至ル迄  
予カ旨趣ヲ體認セヨ云々

佐賀縣士族歎願書寫

今般益大義ヲ明ニシ名分ヲ正フシ冗ヲ去リ管内ニ就  
有名無實ノ弊ヲ除キ專萬國ニ雄飛セシカ爲藩廢  
シ縣ヲ被置候趣且前知事懇篤ノ告諭等敬羨銘  
肝候就テハ此迄被下置候過分ノ食祿其儘頂戴  
罷在候義素餐ノ罪實ニ不堪愧懼候條返上  
仕度奉願候云々

○國名 魯西亞 英吉利 佛蘭西

白耳義 米利堅

日耳曼 奧地利

辛未十月外國新聞節譯

去年佛戰年中佛兵手へ分捕タル佛ノ小銃彈藥大砲及其他ノ軍器數多東洋ノ國ニ買入レシトス既ニシヤス  
ポー銃及ヒ其他ノ元送銃八萬挺程 日本政府へ讓渡ノ義約セシ由當時「ベルリン」府ニテモ「シヤスポー」銃五十六萬挺餘

是皆戰爭中ニ分捕セシ物ニテ其内二十万挺ハ「スタラスボルク」及「メツツ」兩所ノ武庫中ニテ得シモノニテ盡ク新製ノ銃ナリ右ノ外千八百六十六年「奧斯多里」及ヒ「獨逸」南部縣邦ヨリ分捕リ又「ステイデー」ハ「ノーウエル」ド「レステン」及ビ「ブラグ」各所ノ武庫ニテ分捕セシ小銃合ヒテ十二萬挺アリ「ベルリン」ニ於テハ一分捕ノ品々ヲ貯藏スルニ地ナク五千門ノ「佛蘭西」野戰砲及ビ「ミテイル」ス「砲」ヲ其府外ノ「訓練場」へ移セリ又「千香」四年中「丁抹」國トノ戰爭間「夕子ウキルク」シ「エッセル」及ビ「アルセ」各所ニテ分捕セシ大砲輕砲合シテ七千門餘アリト云

此戦争中、李ノ方ニテハ一門ノ砲モ敵ニ奪ハレガリシトリ、實ニ可  
驚<sup>オドロク</sup>コトナリ。○此度「日耳曼」ニテハ一法令ヲ立「日耳曼」列國ノ

総軍ハ砲兵歩兵ニ新式ヲ一定セリ、然レバ右分補ノ軍  
器ハ總テ冬用ノモノナルヘシ、尤「シヤスポー」銃ヲ「ウエルトル」形  
新式ノ銃<sup>ハカ</sup>打銃<sup>ウチ</sup>ニ變製スルニハ其費用尠<sup>ナシ</sup>ニテ出来セル由

○李佛戦争中、李ノ士官死傷ノ大畧、戦死歩兵士官千五  
十九人、騎兵士官七十六人ナリ、戦間士官ノ病死五百人

アリトシ







